

令和 元年 5 月 20 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26463315

研究課題名(和文) 糖尿病の開示・非開示に関する意思決定支援ツール・ガイドの開発

研究課題名(英文) Development of a Decision Aid for Self-disclosure of Diabetes

研究代表者

南村 二美代 (Fumiyo, Minamimura)

大阪府立大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：00634015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：糖尿病は今や珍しい病気ではないが、糖尿病を他者に開示していないことでセルフマネジメントに支障をきたしている患者は少なくない。糖尿病の開示・非開示の選択は、社会生活上のセルフマネジメント行動、対人関係、サポートや患者の心理面に影響を及ぼしている。そのため、患者がそれぞれの選択肢のメリット、デメリットを知り、熟考した上で、最善の選択ができるような支援が必要である。本研究では、看護師による糖尿病の開示・非開示の意思決定支援の実態と課題について面接調査から明らかにし、先行研究と併せて、患者と医療者のための「糖尿病の自己開示における意思決定」支援ツール・ガイドの試案を作成、WEB上で利用可能にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本の糖尿病をめぐる社会状況下、糖尿病のセルフマネジメントの必要性の認識は高い。しかし、それに影響する要因としての糖尿病の自己開示に注目した研究は十分ではない。本研究の成果である「糖尿病の自己開示における意思決定」支援ツール・ガイドは、患者に自己開示のメリット・デメリットの情報を提供し、それらを理解し、熟考した上で最善の意思決定ができることをめざしている。WEB上のツール・ガイドを患者や医療従事者が活用することで、患者のセルフマネジメントや心理的側面にとって、より適切な選択ができれば、糖尿病合併症や重症化予防、QOLの低下の防止に有用であると考えられる。さらに、糖尿病看護の一指針となりうる。

研究成果の概要(英文)：In Japan the prevalence of diabetes is accelerating and not an uncommon issue. However, some patients cover the fact that they have diabetes. It may cause problems on their self-management. Self-disclosure of diabetes to other people may influence not only patients' self-management behavior but also personal relationships, social support and the psychologic aspect in their social life. Therefore, it is important that the patients can choose their best. We thought a decision aid for self-disclosure of diabetes was necessary.

In this study, we examined patient education and decision aiding for self-disclosure of diabetes in nursing. Based on this study and previous work, we developed a decision aid for self-disclosure of diabetes to other people so that the patients and health care provider could use it on WEB.

研究分野：慢性看護学

キーワード：看護学 糖尿病 自己開示 疾病開示 意思決定支援 セルフマネジメント 慢性病 スティグマ

1. 研究開始当初の背景

わが国における糖尿病は増加傾向にある。糖尿病の重症合併症の予防、QOL の低下を防ぐためには、良好な血糖コントロールをめざした適切なセルフマネジメントが重要である。糖尿病は今や珍しい病気ではない。しかし、糖尿病を他者に隠し、そのためにセルフマネジメントに支障をきたしている患者も少なくない。糖尿病の開示・非開示の選択は、社会生活での自己管理行動や心理面、周囲のサポートに影響を及ぼし(加藤ら, 2007)、サポートや心理的ストレスの有無は血糖コントロールに影響を及ぼす(Fisher, E.B.ら, 2009)。

自己開示は、対人関係・コミュニケーションの親密化過程における重要なプロセスであり、他者との人間関係を規定する重要な要因の一つである。糖尿病の病状は多くの場合、患者自身が糖尿病であることを言わなければ、他者にはそれがわからない。Goffman (1963)によると、不可視性の潜在型スティグマの場合、そのことを他者に告げるかどうかという問題が生じ、個人はその選択に迫られ、ジレンマに陥るといふ。糖尿病の自己開示という視座から、対人関係の中でのセルフマネジメント行動の遂行について考えてみると、患者は糖尿病の開示・非開示の意思決定に日々直面し、葛藤していると考えられる。

しかしながら、わが国における糖尿病患者の自己開示の意思決定支援に関する研究は十分ではなく、糖尿病患者が自己開示のメリットやデメリットを考えて意思決定をしているかどうかの情報さえも不足していた。

そこで、研究者は2012年度～2013年度(科学研究費助成事業 研究活動スタート支援 課題番号24890205)「糖尿病の開示・非開示に関する研究～意思決定支援プログラムの開発に向けて」の課題に取り組んだ。その結果から、糖尿病の自己開示は周囲のサポートの獲得、セルフマネジメント行動を優先しやすくなるなどのメリット、特に心理的ストレスの軽減に関係し、非開示は気を遣うなどの心理的ストレスや人間関係性の変化への不安などに関係していた。多くの糖尿病患者は糖尿病の開示・非開示について、そのメリットやデメリットを理解し、熟考したうえで意思決定をしているのではなく、その場の状況で瞬間的になされることが多いことがわかった。また、適切な意思決定をするための判断資料としての、糖尿病の自己開示に関する情報が不足していると考えられた。家族、医療従事者以外の相談者として、インターネット内の他者と答えるものもいた。一般的には他者への相談は糖尿病を自己開示することなしでは困難であるが、インターネットの利用では無名で不特定多数の人に相談できる。インターネットが普及した現代の社会において、支援ツール・ガイドをWEBサイト上に作成することで、より多くの患者や患者を支援する医療従事者が利用でき、役立つのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、糖尿病患者と糖尿病教育・看護に携わる医療従事者のための、「糖尿病の自己開示における意思決定支援ツール・ガイド」試案を作成し、WEBサイト上で利用可能にすることである。

3. 研究の方法

研究代表者は2012年度～2013年度(科学研究費助成事業 研究活動スタート支援 課題番号24890205)「糖尿病の開示・非開示に関する研究～意思決定支援プログラムの開発に向けて」において、患者を対象にした調査研究を行った。次に、本研究では、まず、看護師を対象に糖

尿病の自己開示・非開示の意思決定に関する看護師の関わりや教育・支援の実態について調査研究を実施した。それらの研究から、患者が糖尿病の自己開示・非開示のメリットとデメリットを理解し、熟考した上で意思決定できるように、オタワ意思決定ガイド(O'Connor A., 2004) や International Patient Decision Aid Standards Instrument (version 4.0) 日本語版(大坂ら, 2017)等を参考に、患者と医療従事者のための意思決定支援ツール・ガイドの試案を検討した。

(1) 糖尿病の開示・非開示の意思決定に関する看護師の関わりや教育・支援の実態についての研究

調査の目的：看護師の面接調査から糖尿病の開示・非開示の意思決定に関する看護師の関わりや教育・支援の実態とその課題について明らかにし、「糖尿病の自己開示における意思決定」支援の基礎的資料を得ることである。

調査対象：便宜的方法で抽出された近畿周辺の2～3の病院や医院に勤務する看護師で、糖尿病教育・看護に2年以上携わる者、20～30名程度。

調査方法：半構成的面接法である。インタビュー内容は研究参加者の同意のもとで録音し、逐語録を作成した。

調査内容：人口統計学的変数(年齢、性別)、対象者の特性(職種、糖尿病看護に携わった年数)、糖尿病開示・非開示、その意思決定への看護師の関わりや支援・教育に関する体験や思考、意見などについてデータを収集した。

倫理的配慮：対象者に、研究内容(目的・方法等)参加の自由および参加により負担や不利益が生じないこと、研究結果の公表、個人情報の保護、データの厳重管理について文書と口頭で説明し、同意書の署名をもって承諾を得た。さらに、研究者の所属大学の倫理審査委員会による承認を得た。

分析方法：インタビュー内容について意味を損なわない程度にコード化、カテゴリー化し、内容分析を行った。

(2) 「糖尿病の自己開示における意思決定」支援ツール・ガイド試案の開発

糖尿病の自己開示のメリット・デメリットについての情報提供ページの検討

適切な意思決定のためには、選択肢のそれぞれのメリット・デメリットを理解しておくことが重要で不可欠である。そのため、アメリカ糖尿病協会コンプリートガイド(池田義雄監訳, 2000)や研究者の先行研究結果等から、糖尿病の自己開示のメリット・デメリットについての情報提供のWEBページを検討した。

意思決定支援ツール・ガイドの検討

「患者が自分で意思決定する際に使用できるもの」(患者用)とそれを礎に、看護師を対象にした面接調査結果を踏まえ、「医療従事者が意思決定支援時に使用するもの」(医療者用)を検討した。

4. 研究成果

(1) 糖尿病の開示・非開示の意思決定に関する看護師の関わりや教育・支援の実態についての研究結果と考察

対象者の背景：本人の同意が得られた 24 名に調査を実施した。対象者の性別は女性 100%、年齢 20 歳～50 歳代、糖尿病看護歴は 2～28 年（平均 6.7 年）であった。

糖尿病開示・非開示、その意思決定への看護師の関わりや教育・支援について

大部分の看護師は、糖尿病患者が病気を他者に非開示にしているためにセルフマネジメント行動を優先できないという、多くの事例を経験していた。しかしながら、大部分の看護師は自己開示の視座からの患者教育・支援についてあまり意識していなかった。たとえ、その意思決定支援の必要性を感じていたとしても、患者自身の選択を尊重したいという思いや、知識・情報不足からどのように看護介入していいのかわからないといった迷いなどから、積極的な意思決定支援ではなく、患者自身の自己開示状況によって生じた問題の解決や対処するための患者教育・支援を試みる傾向がみられた。

看護師の関わりや教育・支援として、＜自己開示・非開示によって生じている個々の問題を対処・解決するための支援をする＞、＜患者の思いや情報をチームで共有し、サポートする＞、＜患者の思いや自己開示しない理由を聴き、尊重する、患者自身が決定する＞、＜自己開示・非開示のメリット・デメリット、必要性を説明する＞、＜セルフヘルプグループやピアサポートの紹介や同病者の体験を話したりする＞、＜医療者として患者・家族の相談を受け、サポートする＞、＜患者についての情報を得て、確認する＞、＜その人が必要とする支援をする＞、＜正しい情報を提供する＞、＜患者自身で解決できるように教育をする＞、＜時期に応じた支援をする＞、＜自分の考えを伝える＞、＜患者が偏見をもたないように教育する＞、＜患者と一緒に考える＞、＜糖尿病について患者自身が向き合えるように支援する＞、＜見守る＞、＜他者がいる場合は言動等に配慮する＞、＜意思決定後の患者の反応を気にしておく＞などのカテゴリーが抽出された。

看護師が糖尿病について他者に自己開示した方がよいと考える患者は、＜自己管理ができない患者・自分で対処できずサポートが必要な患者＞、＜低血糖リスクや身の危険がある患者＞、＜高齢患者＞、＜独居の患者＞、＜1 型糖尿病患者＞、＜認知症の患者＞、＜糖尿病を受け入れていない患者＞、＜危険な業務に従事する患者＞などであり、患者が糖尿病について自己開示した方がよいと看護師が考える開示相手として、＜周りの人＞、＜家族・配偶者・身内の人＞、＜職場の人＞、＜キーパーソン＞、＜協力してくれる人・サポートしてくれる人＞、＜学校関係者＞、＜結婚相手＞、＜医療従事者や専門家＞、＜信頼できる人＞などのカテゴリーが抽出された。

多くの看護師は糖尿病の自己開示の視座からの患者教育・支援をあまり意識しておらず、たとえ、その意思決定支援の必要性を感じていたとしても、病気の自己開示のメリット・デメリットなどの知識・情報不足から、積極的な意思決定支援ができずに戸惑っている実態が明らかになり、患者だけでなく、看護師に対しても、意思決定支援ガイドが必要であると考えられた。

(2) 「糖尿病の自己開示における意思決定」WEB サイト

作成した WEB サイトの表記名：糖尿病の開示・非開示に関する意思決定支援ツール・ガイドの WEB サイトを、「糖尿病の自己開示における意思決定」と表記した。

(<http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/dm-selfdisclosure/>)

「糖尿病の自己開示における意思決定」支援ツール・ガイドの内容

糖尿病の自己開示のメリット・デメリットについての情報提供のページを作成した。糖尿

病の自己開示することのメリットとして、研究者の患者を対象にした先行研究結果から抽出した、＜糖尿病療養生活上の自己管理を遵守しやすい＞、＜低血糖時などに身の安全が得られる＞、＜周囲の人々のサポートが得られる＞、＜気が楽で居心地がよい＞、＜ストレス軽減できる＞、＜他の人に糖尿病である自分を理解してもらえる＞、＜他の人と親密化・コミュニケーションがはかりやすい＞、＜孤独感が軽減する＞、＜他者へ糖尿病についての知識・情報を提供できる＞、＜糖尿病である自分を自覚する＞、一方、デメリットとして、＜心理的負担やストレスになる＞、＜居心地悪さや嫌な思いをする＞、＜話していない相手に対する後ろめたさ、隠すことやうそをつくことの罪悪感、否定的感情（怒り、哀れ、悲しみなど）＞、＜人に同情されたり、人に気を遣われたり、特別扱いされる＞、＜気を遣う＞、＜社会的差別＞、＜人に弱みをみせることになる＞、＜糖尿病である自分を自覚する（他の人と違うという思いなど）＞を記載した。

意思決定支援ツール・ガイド（患者用）の流れとして、ステップ1、糖尿病の自己開示における意思決定をする前に、まずは「自分の病気を知る」。ステップ2として、「自己開示の利益と対価あるいはメリット・デメリットを知る」、「自分を知る」（誰に、どこまで、何を、何のために開示するかしないかで悩んでいるのかなどの気持ち、生活、自分の価値観、内的スティグマ、過去の体験、感情・不安・悩み・怒り・心理的ストレスなどについて考える）、「選択肢を考える」、「意思決定の問題を考える」、「自分がどうしたいかを知り、その選択によって自分がしなければならないことを覚悟する」。ステップ3、「実行する」。迷ったら、「最初のステップに戻る」。

意思決定支援ツール・ガイド（医療者用）は、ステップ1、「誰に、どこまで、何を、何のために開示するかしないかで悩んでいるのか患者の気持ちを明確にする」。ステップ2、「意思決定するための知識や情報の提供と患者の理解を確認する」。ステップ3、「患者の思いや考えを明確にする」。ステップ4「意思決定支援をするにあたっての問題を再確認する」。

また、患者がメリット・デメリットを考え、意思決定できるように、WEB ページを印刷し使用できるシートを作成、意思決定後の対処（患者用）、意思決定後の支援（医療者用）についてのページを作成し、自己開示しないことを選択した場合あるいは開示することを選択した場合について、それぞれ生じるかもしれない状況への対処や支援について、さらに、災害時における糖尿病の自己開示についても、患者が事前に考えておけるような情報として記載した。

（3）本研究の限界と今後の課題

意思決定支援ツール・ガイド作成のための基礎的資料を得るために行った研究は、その対象者が限定地域の数施設の患者および看護師であり、一般化するには研究の限界がある。また、糖尿病の自己開示においては、個人背景が異なるため、今後、対象を拡大して検証する必要がある。また、本研究で作成した意思決定支援ツール・ガイドは試案の段階であり、今後実際に患者や医療従事者が活用したうえで、その内容の適切性の検討や評価し、検証や問題点の修正などが必要である。

<引用文献>

アメリカ糖尿病協会 池田義雄監訳（2000）：糖尿病コンプリートガイド，医歯薬出版，東京．
Fisher, E.B., et al. (2009): Healthy Coping in Diabetes: A Guide for Program Development

and implementations . the Diabetes Initiative National Program Office , at Washington University School of Medicine , St. Louis , Missouri , and the university of North Carolina at Chapel Hill with grant support from the Robert Wood Johnson Foundation in Princeton , New Jersey , Copyright .

Goffman, E. (1963) / 石黒毅訳 (1970): スティグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティ , せりか書房 , 東京 .

加藤絢子 , 広瀬会里 , 三輪美紀他 (2007): 糖尿病患者のカミングアウトの実態とサポートについて . 日本糖尿病教育・看護学会誌 , 11 (特別号) , p251 .

[https://www.healthliteracy.jp/pdf/Japanese%20version%20of%20IPDASi%20\(v4.0\)%20.pdf](https://www.healthliteracy.jp/pdf/Japanese%20version%20of%20IPDASi%20(v4.0)%20.pdf)

O' Connor, A. (2004) オタワ個人意思決定ガイド 2019年5月1日

<http://hdl.handle.net/10285/4637>

大坂和可子 , 米倉佑貴 , 有森直子他 (2017): International Patient Decision Aid Standards Instrument (version4.0) 日本語版 2019年5月1日

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 1 件)

Minanimura, F., Hatamochi, C., Yokota, K.& kanayama, N. : Nurses ' education and decision aiding on self-disclosure of diabetes for the patients. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017(Bangkok, Thailand) 2017年10月

[その他] ホームページ等

「糖尿病の自己開示における意思決定」

(<http://www.nursing.osakafu-u.ac.jp/dm-selfdisclosure/>)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

南村 二美代 (MINAMIMURA , Fumiyo)
大阪府立大学・看護学研究科・准教授
研究者番号 : 00634015

(2)研究分担者

簗持 知恵子 (HATAMOCHI , Chieko)
大阪府立大学・看護学研究科・教授
研究者番号 : 70279917

(3)連携研究者 (なし)

(4)研究協力者

横田香世 (YOKOTA , Kayo)
大阪青山大学・健康科学部看護学科・特任教授
研究者番号 : 40851431

金山直美 (KANAYAMA , Naomi)
大阪赤十字病院 慢性分野専門看護師